

# 伝承会報

第十一号 令和二年九月七日発行

編集発行 鈴木伸昌

## 河野百鍊先生 肉声採録

河野百鍊先生の肉声を録音したテープがございます。

宮崎県の中武雅周先生が、大阪の河野先生宅を訪問なされたときに録音した者であります。その数か月後に河野先生は亡くなりました。中武先生は、その報に接し、テープをダビングして河野先生奥様に送られました。その採録を掲載したいと思います。採録は小生が行い、中武先生に朱筆を入れていただきました。

なお、その前に、中武先生が訪問の経緯等を詳しく書かれた日本居合道連盟会報「侍」の十一号、十三号の記事を転載させていただきます。

## 無双直伝英信流第二十代宗家を訪ねて

居合の手解きを頂いた近藤智膳先生との別れ、近くに無双直伝英信流の指導者に恵まれないまま月日が過ぎていきました。無双直伝英信流の二十代宗家河野百鍊先生には、昭和四十年頃からお手紙にて御指導を得ていました。だが先生からの御指示では「どなたでも良い、一応その方の指導を受けておく事が良い」との御指導を頂いていました。されど技の進展もままならず、毎日励んではいるものの疑問は解けず、ふと浮かんだのが「行こう、大阪に」の結論に達したのでした。

昭和四十九年二月十四日、私は特急「彗星」にて都城を後にしたのでした。翌十五日、大阪の大学で学んでいる長男の案内で前もってご連絡頂いた地図を頼りに「堂ヶ芝」のご自宅に着く事が出来ました。前もってご連絡申し上げておりましたので、私の着くのを心待ちに待っておって頂いたようです。初対面のご挨拶を申し上げますと、先生は「まあまあ、遠い所をご苦労さん。」顔面いっぱい笑顔を湛えてお迎え頂きました。私は「この方が、あの宗家河野先生か」、その第一印象に先生の人徳の深さに頭が下がりました。奥様は外出中でしたが、もの二十分ぐらいの後お帰りなされました。先生のお宅は、玄関を入るとそこは事務所風の机に腰掛の調度で、周りは武道に関する諸道具でいっぱいでした。私はお茶を頂きながら、約二時間雑談を交えながら

先生の居合談義のご教授を拝聴する事が出来ました。それを長男がテープに入れてくれたのです。先生は「今日は、午後道場にて貴方の居合を見せてもらいます。」

私は、先生のご案内で浪速の体育館に同行しました。御宅を出るに当たって奥様が「稽古の後、主人が風呂に入るから、その時は止めてください。」と申されました。病あがりの先生の健康を気づかわれる奥様の言葉に、私は「はい、畏まりました。」と申し上げたのでした。

体育館の玄関で先生の門下、「長谷川俊明」氏が待っておられました。先生の指示で、私の指導の助手に呼ばれたのだという事が後でわかりました。服装を整えて道場に入りますと、先生も長谷川氏も準備を終えておられるところでした。先生は「私が、一本一本抜くので、その後実施して下さい。」

緊張の始まり、神前に引き続いて刀の礼、帯刀して先生の動作に釘付けになりました。かくして正座十一本、私は無我夢中。体の動き、技の変化、未だかつて無い緊張の中に莊嚴にして崇高な雰囲気、我を忘れて後をつけて実施しました。何も覚えていない一時が終わりますと、奥居合に移りました。こんどは長谷川氏の演武の後を一本一本続ける事になりました。その間先生には、端座のまま私の動作をご覧いただいているではありませんか。稽古は「立て膝」から「立ち技」に及びました。冬というのに、汗は顔面を流れ、息は弾み、終わりに近

づいてようやく緊張もほぐれて終末に臨んで、ようやく居合の態を得ることが出来たのでした。この間ざっと二時間になんなん、得がたい黄金の時でありました。ゆとりを取りもどしたのか、私は先生の笑顔に気づき、深々と御挨拶を申し上げますと、「中武さん、風呂へ行こう・・・」。はっと思った私は「先生、奥様がお風呂は、だめと・・・、その途端「いやいや、行こう行こう・・・」速いこと、そのままですたと館内の風呂場へ。私は、先生の背を流しながら「こんな大先生に近づけるなんて・・・と感激の一日、あの先生の技は神技、今も私の脳裏にしっかりと焼き付いて離れることはありません。」

先生のお屋敷に一泊を許された私は、ひと晩先生の今日までのお話をお聞きする事が出来ました。翌朝にご指導頂いた御礼を申し上げ、おいとまを頂戴して宮崎へ向けて大阪を後に。帰宅後、都城の名産の木刀二振り(武蔵刀と普通型)を記念にお送りしますと、直後ここに紹介するお手紙がまいりました。以後私は、このお手紙の内容を分析して、稽古の励みとして参りました。

・・・手紙の内容・・・

中武雅周殿

河野百鍊

拝啓 寒気清冽に候、

御安着と存候。

此度は遠路態々上阪

何の風情とて之無く、且つ

道の研究にも資する処

乏しく申し訳も之無く存居候。

練習の時間は短きも

十分に拝見、同士の少

ない地に置いて良くも

あの境地迄体得致されし

御研究に対して、

敬意を表すると共に、手引きの

智膳先生に深い敬意

を表するもの候。最早、私の

申し上げる処は之無く、

その眼目を見詰めて、技に

偏せず、格調高き

自分のモノを得る事に

不退の御精進を(お互いに)

心より御祈申上候。

又の御逢いと、あの刈千切うたの

名調子を拝聴楽しみ候。

先は右迄。

本日は、私の七六回誕生日で、本夕は悪友十五と一夕の由。

昭和四十九年二月十九日

### 河野百錬先生肉声テープより採録

(どうしても聞き取れない部分は〇〇と記しております。)

今年の二月一五日、久々に上阪の機会を得まして、河野先生のお宅にお邪魔をいたしました。居合についてのご指導をお受けして強い感銘を受けて帰ったばかりでございました。

この大先生がご逝去なされたとの報に接しまして、信じられない、本当に驚きました。私をご厄介になりましたときは、少々お風邪気味のあとでいくらかその痕跡は残っておりましたが、きわめてご健康そのもの、顔色もよろしく、声にも伸びがありました。夜は府立体育館におきまして直接居合のご指導をうけるなど、この道についての先生の深い居合に対するご愛情とそれから居合に対するご見識とを御教授くださいまして、私は大変な勉強を得て、喜んで帰ったのでございま

した。

戦後の混雑とした中から居合道の普及とこの居合道が持つ精神の探求に多くの功績を残されまして、多くの門弟から慕われ、宗家にふさわしい人格とご見識をお持ちでございました。何も申し上げることもできません。私は初めてご拝顔を得まして先生のあの柔和な顔と非常に明るい愛情のあるお声を今でも耳の底に刻みついておりまして、いつもこのテープを聞く度にあの優しい顔を思い出すのでございます。

生前の先生のご遺徳を偲び、はるかに先生のご冥福をお祈り申し上げますとともに、奥様のご健康を併せてお祈り申し上げます。なおまた、日本の居合道がますます発展いたしますことをここに祈念申し上げます。都城中武雅周でございますが、お悔やみの一節とさせていただきます。それでは先生とご対談させていただきました時の録音をそのままテープにのせてお送り申し上げます。合掌。

河野「今日は丁度金曜日ですから、5時半からでないといけないから。木曜日は東警察があつてその道場。これ30人くらいしていますよ。こっちは時間的に早すぎるから5、6人か、少ないときは2、3人というくらいです。まあ稽古するには一番いいですけどね。あと剣道がありますから、5時半から6時半までやって、6時半から8時半まで剣道があります。で剣道のほうに追っかけられるから6時半まで

どうしてもしまわなければならない、こっちはほうは。府立の体育館の別館です。」

中武「一度一回お伺いしてみないと、場所がわからないし、一面識もないし・・・できるだけ私は甘えて帰りたいと」

河野「お手紙差し上げたの着きましたか？　うちは今家内出てますけど、もう帰るでしょうけれども、二人ですから、よろしかったら泊まっていつてください。」

中武「よろしくお願いいたします。そういうつもりで参りましたのでどうか。お話もお聞きしますし、めったにこういう大先生にお会いできませんので」

河野「いやいや、アツハツハツハ」

中武「本当に宮崎にありまして、私たち居合俱樂部というのを作って、一時は高千穂でも七、八人おりまして、それからまもなく宮崎に出たものですから延岡の人たちを中心にそういった研修会をやったんですよ。そこでもですね、色々そういう理合に対する解釈の仕方が微妙なところで違うし、こりゃいかんと。私も同じ教育事務所におりました職員に井上君というのがおりまして、井上秋三郎君というのがおりまして、かれが非常に一生懸命で、彼と一緒に居合道の総本家のご指導を受けることが一番だと、でないとなの人に話せばここはこうだと、この人に聞けばこうだと。いったいどうなのか。もう帰一するのはひ

とつしかない。それをわきまさえれば、あの人達のいうところの理屈はわかるだろうし、しかし本元はこうなんだということができると。特に私たち職業柄で、学校に勤めておるものですから、まあ来てくれと、このへんをわからんではどうじゃるかと言われた場合にですね、まあおかしな話ですけども、そこで指導助言をするという機会がかなりあるわけです。」

河野「そうですね。」

中武「そうしますと、頂きました図説等を紐解きまして、図説等を参考にしたしましてこの微妙な業については、何かこう説明できないものかと、私たちが半信半疑であっちゃいかんと、居合いの本義としてまいかんと、成瀬栄宏先生がおられました、あの方に最初私手紙出しましたときに先生のお名前をお聞きしまして、それで昭和四十二年だったと思いますが、初めてこちらにお手紙差し上げました。」

河野「もう二、三年前になくなったんですね。」

中武「そうですね。」

河野「ええ人でしたがね。ええ、今もあのありますが、大日本居合道八重垣会いうのを昭和六年に私が作ったときの主なものは坂本吉郎、堀寅次、わし三人しか残ってないですよ。あとみんな死んだですよ。ひところは千人くらいの会員おりましたね。とにかく日本で最初の居合道の会なんですわ。わしの文献にも書いてありますわ。それを私が

世話してきたんですが、昭和二十五年に宗家問題が起こって預からな  
いかんようになりましてね、土佐からこっちお預かりしなくてはいか  
んようになりまして、それを機会にそれをほかの人に、いまもう亡く  
なった範士の高田言う人に、それから転々して成瀬さんが会長やって、  
その次今なくなったから堀寅次というのが、今やっぱり週一回か二回稽  
古している。私はもうそのほうとは縁がきれてるわけですわ。」

中武「わたしもまあそうこうしているうちに、延岡の旭化成に近藤先  
生がおられるということ。」

河野「ええ近藤智膳。」

中武「あの人を高千穂に、二ヶ月に一回ぐらいだったでしょうか。来  
ていただいて。あの先生が習得されたなりのもので、ま、育ったと。  
色々と直してもらいましたし、指導をうけてまして、その先生の薫陶  
を受けた子供たちもわき道をそれないで今日に至っておる。非常に私  
はその点で喜んでおるわけです。」

河野「近藤智膳先生は私懇意でした。あの人の居合は私拝見したこ  
とないです。ないんですが、最後は教士を貰いましたかね。どうい  
居合いだったか余り知りませんが、最後は剣道の範士でね。あれ全剣連の旭  
化成ですか、あれで昭和二十八年か三十年頃赴任するとき、郷里に帰  
るとき一緒の車で、それが終わりでした。その後お会いする機会がな  
くて。それで亡くなって。」

中武「大分が非常に盛んなんですね。」

河野「大分もだいぶ盛んですね。」

中武「私別府に行つたんです。宮崎にはそういう指導者がいないし、昇段試験も勿論できませんから。近藤先生が別府におられたものですから。大分県にはいろんな先生が多いですね。」

河野「あそこに八段もつとる環(たまき)というのがおりましてね。環さんなんかもうちの方の連盟におつて教士を出したんで、だいぶ古いです。それから田舎のほうに宮川いうのがおります。教育委員長かなんかしてます。そこらは古いですよ。もうひとつ古い人が別府の茶園かなんかやってる人がおりますがね。今中心で活躍しているのは環さんなんかじゃないすか。」

中武「そうですね。その方の名前は良く聞いて。宮崎あたりにも今お出でになるんじゃないかと思うんです。宮崎にはおりませんです。」

河野「居合は変な具合になって二つの団体がありますわね。剣道連盟と」

中武「連盟で非常にわたしなんかはあの、最近事情はらむ(心)団体だと思ふんですがね。宮崎あたりでは九州一円でもそういう面では剣道連盟のあり方について」

河野「あれは剣道連盟が後から出来たから、会員募集のためにね、卑劣なことばっかり言うてね。「お前剣道やつとるんだつたらこつちの居

合やらんと駄目だ」とかはつきりいうてね、そういうものが今でも尾を引いてる。しかしどこの居合でも一緒やからね。自分がやろうと思つたらね、思うとおりに。剣道連盟が昭和28年に発足したときに、そのときでも発会式のときわし一人で居合を抜かせて貰つてね。そういう時代はまだ良かったんです。

それから昭和三十一年ごろですわ。アメちゃんの圧力がだいぶ鈍つたころ、こりゃあ剣道も居合が無いと寂しいと、日本で剣道連盟の定款を変えてね剣道の中に雑刀と居合と杖術ですか、これを入れると定款を変更した。ところが女は仲々あつぱれば、雑刀の方はね、そんなものに入る必要はない。俺のほうは立派な会館があるんだと、俺のほうは独立だつてできるんだと、とうとう入らなかつた。

ところが居合と杖道は、杖道は文句なしに入ったんですね。居合のほうは種がないでしょ。我々のところに全部全国的にあつたんだから。そのうち重鎮を引き抜きにかかつて、で大阪でも2・3向こうに寝返りした。それから各地にそういうものがね。九州には末次いうのがおりますが、久留米か、寝返りをうつてそれが今中心になって会員が今大方そういうのが出来てるでしょ。こつちのが少し多いですか。つまりそういう会をつくるためにそういう卑劣な行動行為をやつたんですな。

それはそれでいいすよ。こつち何ぼわしらにとっては、地域によつ

て増える会は何ぼあってもええんやと。理想としては一つが一番ええけども、○○○くれてできる連盟はなんぼあろうと構わん。と同時に一人の者がどの会に入ろうと構わん、勝手だ。どこへ行っても稽古さえ出来れば。

ところが向こうはそういわん。俺の方にこなんだからお前どうせ、大抵剣道やっとりますから、剣道の審査のときあかんとはつきり言いましたから。吉澤一喜という範士がね。柔道の範士、それから剣道の範士、居合の範士と範士号三つ持つてる。これは伯耆流ですわ。それがはつきり言うんですよ。そういう、ま、会員を作りたいために言うたんですね。それで今同等のものが出来てるんですな。大抵居合をやる人は剣道やりますからね、○○○○。だからそういうこと言うたらそうかいなど、そりゃ六段七段、七段八段貫つてたら関係ないですけどね。やっぱり八段は○○○として七段までははつきりした試験をほとんど受けないかんですからね。

(中武 註)要するにこの節は、※「七段、八段の人は、受験の心配は無い。・・・八段は年齢制限や条件によって試験が程度の差はあれ、はぶかれる事もある。・・・ただ七段までは試験を課せられる」の意と思う。

そうするとやっぱり動くんですな。それを利用して会員を作った。だからわしはいつも若い人に、あんた剣道やるんか、剣道やる。そ

れだったら剣道連盟に居合道部というのがあから、どこの居合も一緒やからそっち行きなさいとやってやるんです。ところが十人に2、3人はいやあそれははつきり知ってますと、剣道もやっどるけれどもそれよりも居合道連盟の居合を習いたいからと、それだったらとわかった上でだったらよろしいというてやってる人もありますね。色々ですね。」

中武「近藤先生は剣道連盟のほうでしたですけれども、あの人ははつきり言っていましたですね。段を追うような居合はするなど。ま普及ということがあから、ある程度はそういうことも考えんないかん。私なんかも初段から受けるわけですな。やかましかったですよ。他の人が剣道連盟でやっていると三日くらいで五段というのがおるんですな。」

河野「二、三日の講習で三段貫った人がある。」

中武「いやあ、五段まで貫つてますよ。ま、それはしかし居合というものはこういうものだと、自分が居合を習った先生はこういう風に自分を薰陶してくれたと、それを守ることが居合の道を正しく伝承することだと、いわゆる道を伝承するということですね。」

河野「まあしかし居合でも剣道でも、形のあり方というものはもう二、三年か、三段くらいまで覚えますからね。それに息吹を与える。つまり生命づけるのは自分がやるんですからな。そのところが難しい。」

いくつになっても一緒ですわ。昨日はうまいこと抜けても今日は抜けないとかいうようなね、心の動きによってみんな違うんですからね。形はも二、三年習うたらわかる。」

中武「本当に心で抜いて斬るということは難しいと思いますね。」

河野「結局眼目はあれですよ、剣道でも何でもすな、いかなるところでも一糸乱れざる気持ちをもつてやりうるかどうか、それがなかなか出来ないですわ。それだけです。むしろはそれだけが狙いと思えます。形、眼で見えるものを習得するのは訳ないです、形は。ところが形をさせるのは眼にみえないものがさせるのだから、その眼にみえないものが一糸動かない状態にあってどういのかを処していくということが出来れば一番えらいですな。それがなかなか出来ないんですから。」

結局あれですな、一人で都都逸なんか便所で歌うと上手いこと歌えるのが、十人くらい芸妓が取りまいて今度は自分の番だいうときに同じように歌えるかと、それですわな。それ以外は何者も無い。見えるものは形がある。そんなものは二、三年でわかる。剣道でもそうです。きわめて単純。単純なものほど難しい。それはその単純な形というものは習得するのは訳ないですね。まあ段でいうたら二、三段まででもうはつきりわかります。剣道でもそうです。そこが難しいです。」

ここで電話が入る

河野「(電話の相手に) ああ、後藤さん。おっちゃん。あんたもし見えたらね、プリント五、六枚して貰いたいのが出来てるから。今日明日でもよろしい。いつでもええ、お願いしますわ。ええどうぞ。」

河野「(中武氏に) だからなかなか難しいですよ。だから私が研究するのはそれだけです。なかなか出来ませんな、それは。大会なんかでね、道場で抜くような心境で、同 あじ心境で抜けるかどうかですよ。そりゃあ昨日は抜けても今日は抜けん、それはいわゆる生活ですかな、生活が影響してるんだから。そのところでしょうね、眼目は。それ以外ないです。あとは技術の問題です。刀が少々高かろうと低かろうと、英信流は英信流のあり方が決まってるからそれは踏襲しなければいかんけれども、それを運ぶ気持ちですわな。目に見えるものでなしに、眼にみえるものをさせる眼にみえない気持ちがあるか。それは自分は何かるさ。幾千万辺稽古した人は大概の人が見たら、ああまいなとこう見るかもしれないけれども、それをやっつたら本人の気持ちかどうか。それは本人でないとわからんですからね、気持ち。だから自分が平然として泰然として一糸乱れざるの不撓の気持ちで抜けておるかどうかは自分でないとわからんですわな。そのところでしょうな。極めて単純ですよ、もう。それがなかなか出来ん。それができたらいいしたもんだ。」

中武「なかなか出来ないのが本当でしょうね。一生人間形成の修練で

すから。」

河野「目に見えるものは出来るから訳ないですな。人が感心するようなものは。しかし自分が割り切れておるかどうか、これは難しいですな。また逆に長年やっとなるけど不器用な人もありますからね。不器用ではあるけれどもその人が極めて人格的に立派な人であれば素人がみても「何かわからんけどあの人の居合はええな」とか、「あの人の剣道の風格はええな」というようなことがたくさんありますわね。それがいわゆるところの眼に見えないもの、立派な人だからそこに滲み出る何物かがある。結局そういうところを狙っていかんだらしゃあないですわな。それ以上はやはり形を流を踏襲する、流を唱える以上はその流のあり方をきちんと捉える必要がありますわな。あるけど逆にいうてやね、どんな形であろうとその人の魂が立派でさえあればそれが一番ええんだということになりますけどね。」

中武「それはやっぱり基本に忠実でない」と

河野「基本というものはそうです。形から入るんですからね。すべて。だから形をきっちりつかむということは必要ですわな。それは勿論必要です。剣道でいうてもそうです。三本が二本とも負ける。負けた、勝った人よりも負けた人のほうが立派な風格ということがある。それは何故かという、その人が立派な魂を持っておるからと考えざるをえませんわな。」

結局あれですな。仏教の言葉にもありますように、人間が外部に〇

〇〇象徴を表すものはその人の行動と言葉しかないんだから、まあ文献にも書いてあるけれども、大別すると二つしかないですわな。ところが仏典にあります、言葉は心の響き、行動は心の影、一切もう心をはなれて、目に見えない心を離れて、その耳に聞こえるもの、目に見えるものは實際眼に見ることのできない、聞くことの出来ない、見ることの出来ないものがさしておる。それは何か、それは心である。言うたんですね。あれは間違いないですな。

だからまあ、形というものは第二義であってその根本は、形の根本は何であるかということでしょうな、いうことですが、それがまた難しい。形なんかじきですよ。もう二、三辺やればね、剣道なんかもそのとおりですわな。そうすると決めてあるんだから、今の剣道は。居合でもそうですわ。各流派によって形がかわっておる。その形を踏襲するのは二、三年やれば、わかりますわな。」

中武「結局帰一するものは皆同じだと。そういうことを考えれば今のようなガタガタはなくならなにかんのですね。」

河野「そうです、そうです。だから今の剣道でも〇段の士はいうてますよ。本当の剣道じゃない。あれは試合のためにああいう風になつてる。面を打つためには小手とみせかけて面を打つ。胴を打とうとするときは小手あるいは面と見せかけて打つ。これは一切ごまかします

ね。ごまかしは武道にはないんだと、本当は。しかし、今は団体がたくさんあって、試合が多すぎるから、どんな調子でもええ、勝たなかんという教え方してるでしょ。習うほうもそうですわ。勝ったほうがええということばっかし考えとる。それは勝つことはよろしいけど、勝つために心を乱し、本当の道をおこなっていないというのが現代の剣道ですな。

居合でもそのとおりに、極端にいうとね。極端に言うたら、サアーッと抜いてね、形よくサアーッと抜いといて、サツサツと斬つといてパツと入れるでしょ。そのほうが喜ぶ。遅抜きの早納め。これは居合のもう全然裏をいっとる。刀が活動する間は何ぼ早くてもええんですわ、敵を威嚇するための刀ならね。不自然でない速さであれば。入れるのはもうあと残心だから、いつどっからきてもええという気持ちでズーツとゆくりいれればそれでええ。それを逆にいっとる人が多いんですわ、ええ。これはもう全然なつてないですわな。そういうところが形の上から言うたら注意を要するところですよ。もう斬ったら、たとえ一刀だけ(心)こう斬ってこう斬ったらもうそれで終いですからね。あとは残心。如何に(心)発動してわれわれはそれに対処していくぞ、それに応じて勝つぞという気持ち。それがご承知の残心ですな。〇〇〇の。斬った気分を残す。だからこう斬ってこう斬ったらあとはもうゆつくりと納刀したらええんですわ。それを逆にいっとる。サアーツと斬

って一本位スーツと吸うて、でパーっといつて、血ぶりでサツと入れる。そのほうがよう見えるつちゅうわけやね。だからその、そういうところで間違う。」

中武「遅抜きの早納め。先生の何かにも書いてありましたわね。」

河野「そういうところがあるんですね。居合の今日あるのは近藤先生あたりの源流であるところの中山博道、これは非常に器用な人でね。中山先生の時代は、もう、教士でも、私昭和十六年に教士ですがね。そのときはねもう珍しく全国で二人教士やった。私と土佐の山本と言うのがね。私より三つ四つ、晴介でなしに、山本宅治言う人。山本晴介さんはもっと早いです。それから先だつて死んだ政岡、あれなんかも早いです。で昭和十六年に教士が二人おつて、それまでは教士はね全国で一人ずつ。わしらの時より多かつた。それくらいしかおらんかつた。今もう何十人でもできるんですわな。」

電話が入る

河野「(電話の相手に) はいはい、はいそうです。あ、どうも。ええ、ええ、そうそう、この前の前のあの、出金伝票まだ出してないからね。ええ、そうそうそうそう。そうですな。取り消しといってください。え、はあはあ、ああそう。はいはい、お願いします。はい、どうも。」

河野「(中武氏に) だからその中山先生は自分のお弟子さんのね、橋本統陽いう、これは立派な人でした。その人にだけ範士出してね、範士

はもう自分で独占しとったです。ズーッと。今範士はあんた年に5人も6人も出来るんですわ。教士でも何十人もおりますしね。それだけ難しいなったんか、易くなったんか何かわかりませんか。ま、時代がだいぶ変わってきたんですね。」

中武「普及してきたことは事実ですね。普及の仕方が正しいかどうかはわかりませんが。」

河野「そうですね。人口的に多いからそういう風になるんでしょうね。」

中武「そういう面では本当の居合。日本民族の伝承すべき非常に価値の高い文化をその底辺を広めていくことは非常に大事だと、今の時代ほど大事だと僕は思うんですね。正しくそれが伝承されているかということですね。狭い考え方で持って自分の流派とか、あるいはその感情的なものだけでもって排他的なあれであってはいけない。しかし何が本物で何が一番大事なものと、何が一番もとであるかということをおわたりをわきまえたいと思います。」

河野「そりゃあそうですね。各流派によって、この流が自分は好きだつちゅうやつをやればええんで、それはあくまで型ですからね。心の問題はもうどんな居合、何流でもそれは、わしがさっき申し上げた眼目、それ以外何もないです。極めて単純です。」

奥さんが帰ってくる。

河野「ああ、中武さんいらしとる。」

中武「宮崎の中武でございます。」

奥様「どうもようこそ。ちよつと失礼します。」

河野「だから型つちゅうのは自分が好きな流儀をやればいいんですからね。それはいいんですわね。そのあとの本当の眼目は皆一緒ですよ。」

お茶でも花でも、そりゃ一緒ですよ。みんな。その一緒のものが難しいですわね。目に見えるものは易いです。」

中武「お茶の好きな方と一緒にしましてですね、お茶の師匠さんなんですわね。お茶を教えなさる場合にどういうことをもとにしてお茶を教えなさるのかと、そりゃお茶もお仕事ですからね、生計を立てにゃいかんと、それをするにはお弟子さんもたくさんとらにゃいかんと、お弟子さんをたくさんとって月謝をとれば自分の生計も豊かになるし見入りもいいと、まあそれだけじゃないでしょうと私聞いたんですね。結局これも日本の座る民族の編み出したひとつの文化伝承文化であれば、そういう本質的なものをこそを今時代が要求しているのではないかと、如何ですかという、ごもつともそのとおりだと。最初はまあ自分の食費だと、弟子をとれば何人か飯が食えらと。まあこれは基本的なものでしょうと。そういう話をしたんですがね。もうお茶にしてもお花にしても大事な部分にしてはやつちやならないと」

河野「そりゃあもうあらゆる芸術、あらゆる道の根本眼目はそれに違いないですな。一糸乱れざる心。いつでもどんな場合に処しても一糸

乱れざる心を。だから武蔵の言う巖の身という、ね、あれと一緒にですわね。全部一緒ですわ。その一緒にやつが難しい。形を習うのは訳ないです。形は自分が信ずるところの形を千回万回鍛錬さえすれば、あるところまではその形はいけるだろうと。だがその形を運ぶ眼に見えないものはどういふ風にその人があるかちゅうことが問題ですね。

まあ練磨したら、した人は居合でもね上手やなあと思うようにピュアピュアとやりますわね。でもそりゃあその人がどんな気持ちでやるとるかちゅうことはその人しかわからんですからね。自分が自分にする行の鍛錬とはよう言うたもんで、自分が自分にするんだから自分しかわからんですよ。本当に乱れざる心でやっておるかどうか。いつでもそういう気持ちでやっておられるか。なっかなかできません。

そらできます。甚だしいのは、初心の人の大会なんかで抜くのを見とつても手足が震えたりするような状態、あれが一番極端な張り方ですわね。そういうことのないように、その人の気持ちはどういう気持ちでおるかちゅうことですか、ええ。そういう作用を見極めていけば、あとは形のものほとんどんやれば、形は下手にならぬですからね。まあ近頃はそういう風に考えてやってますけどね。それがなかなかできません。」

中武「難しいですね。今毎朝二十分か三十分。はじめましてからもう七年くらいたちます。」

河野「ああ、そうですか、そりゃあ大変ですな。」

中武「一本目だけをやるのですね。だんだん難しくなりますね。非常に難しいです。井上君というのがもう一人おるんです。ちよつとわたしのところは山手にはいましたところの校長をしておるんですが、これが毎朝一本目だけを。」

河野「そりゃあもう一本目、正座が一番難しいですよ。正座の中でも一本目。難しいですね。それが一番単純だし。奥の居合とかいうような手数が多いのは易いですからね。結局単純なものほど難しいものなわけですからね。」